

チャンフー通りの発掘調査

EXCAVATION SURVEY OF TRAN PHU STREET

吉成 薫*
YOSHINARI Kaoru

The result of archaeological excavation survey carried out in Tran Phu Street have led us to believe that plot boundaries of Hoi An town in the old days may have differed quite markedly from that of the present town. From this we can infer that a large scale reconstruction of streets in Hoi An was probably carried out in the French colonial period.

昭和女子大学国際文化研究所のベトナム・ホイアン町並み保存調査には、建築学調査を側面から補助する目的で考古学研究者が参加している。建築班から考古班へ当初要請された調査内容は第1に、現存する家並みが近年の街路整備により前部を切断されているらしいことから、各家が本来どこまで前方に張り出していたかを道路の発掘等で確かめること、第2に家の建築の年代を決定する手がかりを考古学的に得られるか確かめることであった。第2点については1773年に起きた西山（タイソン）党の乱によって、この地区が焼失したという情報から、その焼土層あるいは建築物の焼け跡などが発見できないかというのが建築班の考え方であった。

第1回の考古学調査は1993年3月19日の午後

に開始された。ボーリング棒を使い、現地史跡管理事務所副所長（当時。現在は所長）ミン氏の意見を聞きながら要点でボーリング調査を行なった。建築班から要請されていた探査については、当面の調査地域にあたるチャンフー通りが全面舗装されており不可能であるため、歩道部分に上が露出している数カ所でのボーリング調査を行なった。いずれも地下5～20cmでレンガ様のものに当たり、道路周辺でのボーリング調査ではほとんど成果を得られないという感触を得た。

次に家屋内に場所を移し、本来の内庭の背後にあったいわゆる後ろ家が倒壊し、広い裏庭状を呈する部分でボーリング調査を行なった。ボーリング棒の入る長さはまちまちで、地下にレ

* 昭和女子大学文学部日本文化史学科講師

Lecturer, Dept. of Japanese Cultural History, Faculty of Literature, Showa Women's Univ.

ンガ、石等のガレキが埋まっているという感触であった。この結果を踏まえ、翌日ミン副所長を交え今後の方針を検討した結果、家屋内の後家が倒壊し裏庭状になった部分に試掘坑を1~2開け、内庭あるいは後家の土台・地業等を探り、その下に存在する可能性のある日本人町の跡、特に日本製陶磁器類等の出土を期待して試掘を行なうことを決定した。

試掘は1993年3月23日より現地労働者2名を雇い、チャンフー通り85番、65番、69番の3家屋の裏庭状部分でそれぞれ一カ所ずつ行なわれた。このうち、85番については、1993年9月の第2次調査においても引き続き発掘を行ない、その結果を既に発表しているため、本稿では取り上げない。

1. チャンフー65番（3月24日、25日に調査） （図1・写真1参照）

裏庭状の部分のほぼ中央部に南北2 m 東西1

mのトレンチを設定し試掘した。トレンチの南側からは地下約80cmからレンガ組み、北側からは地下約40cmから壁体状のレンガ組みが出土した。中央部を掘り下げると約90cm地下にレンガ敷があり、数枚重なっているらしいことが判明した。翌日トレンチを北側に約50cm延長して、北側の壁体状のレンガ組みの性格を検討した結果、このレンガ組みは幅約50cmで9段のレンガからなり、現存する前家と対をなす後ろ家の基礎であるという結論を得た。レンガ組みの最上段の上面にはプラスターの跡が認められないため、これが本来の基礎の上面と考えて良からう。この9段のレンガ積み構造の下からは、ていねいに組まれたレンガの床状の構造が出土した。この構造と前述の後ろ家の基礎の間には泥状のものがはさまっており、現存する家を建築した際に、それ以前に存在した何かしらの構造物のレンガ敷きを利用して、その上に基礎を乗せたことが推測された。つまり現存する家屋以前に

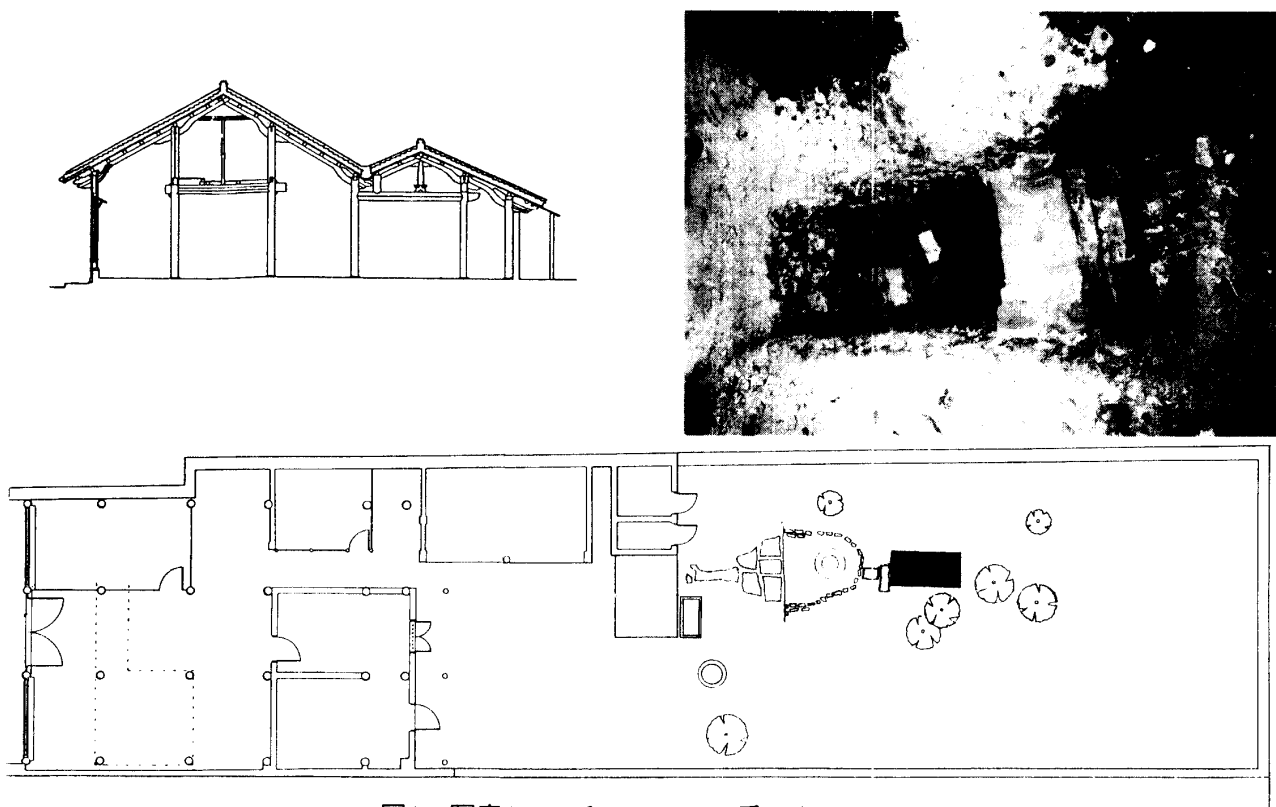


図1・写真1 チャンフー65番のトレンチ

ここには別の構造物が存在したことが判明し、発掘によって以前に存在した家並み等の検証が可能であるという見通しが得られた。なおトレンチ南側のレンガ組みは北側のレンガ組みと何らかの関係がありそうであるが、詳しいことは不明である。

2. チャンフー69番（3月27日に調査）

（図2・写真2参照）

裏庭の中央や北寄りに東西・南北1 m四方のトレンチを設定した。約60cm掘り下げたところ床状のレンガ組みが出土したが、レンガ組みの軸線が北から東へ約10～12度ふれていて、現存



する家の軸線ともずれていることが判明し、それ以前の構造物と考えられる。レンガ組みの一部を外したところ、レンガは1枚のみで、その下はレンガ片を混じえた黒土の層が数10cm以上続くことがボーリングにより推定された。またトレンチの壁面には地下20cmから約10cmの幅でレンガ片を含む黒っぽく、しまりのある層が判別された。

家の主人の話によると、自分が引っ越してきた時には裏庭部分に紙を染める職人が住んでいたという。その生活面は現在の裏庭の地表面と同じだと言うことで、地下20cmの層がそのひとつ前の生活面とすると、前述のレンガ敷きはその前の構造物ということになる。ボーリング調査の感触では、このレンガ敷きの下には別の構造物はなさそうであった。

1994年に行なわれた第3次調査では、さらに2カ所の試掘を行なった。チャンフー通り144番と78番である。144番は新しく建てられた工場で街路に面した部分は前庭状になっている。工場は既に廃業しているが、この工場以前の建物の範囲は両隣の民家の壁面に残る痕跡によってわかる。なお、ここは現在ではホテルが建てられている。一方、78番は前家の前部を一部切

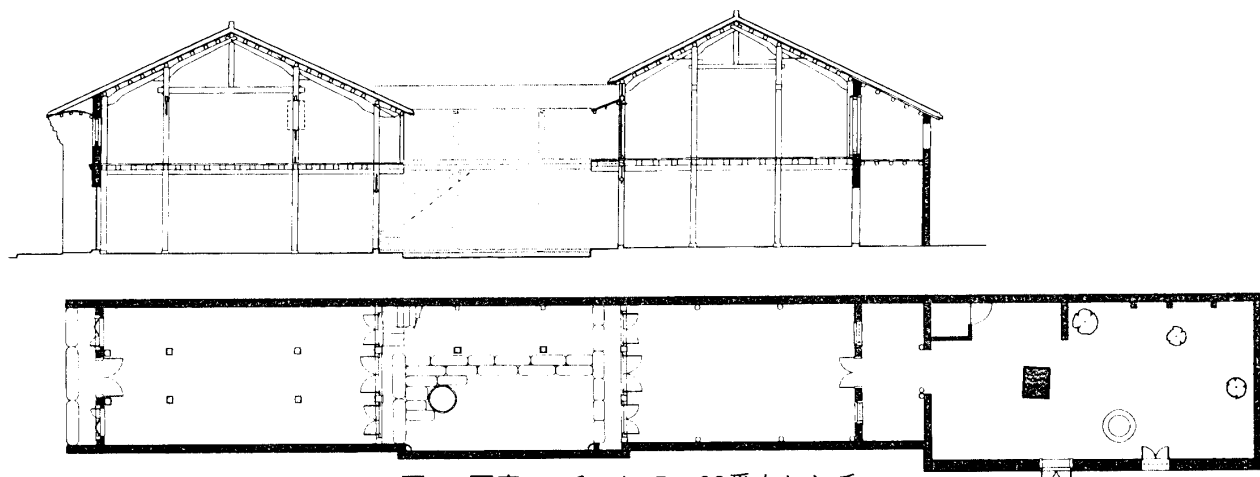


図2・写真2 チャンフー69番トレンチ

断した姿をしており、街路に面した部分付近で旧来の前家と街路との関係が解明できる可能性を持つ建物と位置づけられた。

3. チャンフー144番（3月18、19日に調査）

前庭入口より1m50cm、東隣の家の壁面より2mの位置を起点に南北1m、東西2mのトレンチを設定し、試掘を開始した。トレンチのほぼ中央寄り地下数センチから上面が一边約33cmの正方形で厚さ約15cmの切石が出土したが、これは工場が建てられる前に存在した前家の柱の礎石で原位置のまま残されていたと考えられる。その下には約4cmの厚さで黄色っぽい砂が敷かれ、その下にレンガ片を含む基礎となる層があった。一方トレンチの西側からは地下約25cmからレンガ敷きの床面が出土したため、それを追うために北側に幅50cmでトレンチを延長した。このレンガ敷きは厚さ1枚のみで、東側ではこわれている。レンガ敷きの下にはその基礎であるレンガ片を含む層があり、その下は黄色の砂まじりの自然層と思われる。レンガ敷きを追ってトレンチを延長すると南北に走る排水路が現れた。この排水路はレンガ敷きの上に薄いレンガ状のもの（土器片?）をはさんで乗せられている。さらに排水路を越えてトレンチを延長するとレンガ敷きの組み方向が変化し、さらに70cm×30cmほどの平らな切石が床面にはめ込まれているのが認められた。

以上の結果、144番では黄色い砂まじりの自然層の上に基礎が作られ、レンガ一枚のみの床面が最初に建造されて使用された。その後、この床面を一部こわすかたちで家が建てられ、その際に前家の柱の礎石がすえられた。その家の床面は礎石の上面とほぼ同じ高さで泥をつきかためて作ったたたき状のものだったらしく、その痕跡がわずかながら地表近くから認められた。排水路もこの家の属するもので、そこにも

ともとあったレンガ敷きを利用してその上に据えてある。この排水路は前家の二棟の間に据えられたものと考えられるが、その下の床面もこの付近でレンガ組の方向が変化し、その北側に切石を用いている点が示唆的である。つまり二つの重なる構造物が同じ様な構成を持っていたと暗示しているように思われるのである。レンガ敷きが最初の構造物であろうことは、トレンチ東側を地下110cmまで掘り下げても黄色の砂まじりの層が連続するだけであったことで裏付けられよう。

144番ではこのほかにもうひとつトレンチを設定した。入口から約8m70cm入り、西側の隣家の壁から1m20cmほど離れた部分に約1m四方のトレンチを設定したが、これは前家の背後の部分の検出を意図したものであった。結果的にはレンガの壁体とおぼしきものと、その南に40cm×90cmほどの切石を一行に並べた遺構が検出された。切石は1枚のレンガ敷きの上に乗っており、また壁体の北にはつきかためた様な床面があった。このあたりは建物の内庭に相当すると考えられ、その関係の遺構と考えられる。

4. チャンフー78番（3月22日に調査）

街路に面したレンガ敷きに1.2m四方のトレンチを設定し、レンガ敷きをはずして掘り下げた。レンガ敷きの下は固めた砂、その下はレンガ片混じりの層があり、陶器片もまじる。さらに掘り進むと礎石風の切石、レンガなどの混然とした層が地下120cmくらいまで続くことが判明した。地下90cmに炭と食用の小さな巻貝の貝殻とが混じった層が認められたが、これも投棄されたもので、生活面の様には思われなかった。120cm以下は黄色の砂層で自然層であろう。この攪乱層が何が原因でできたかは不明であるが、電気のガイ子などが出土しており、近年の道路工事あるいは道路に付随する排水溝の工事

などによる可能性が高いと思われる。

以上の結果、現在保存の対象としている家並み以前に構造物が存在したことは確実であり、事情が許せば広範囲の発掘によって、ホイアンの町並みの形成の事情がある程度解明できる可能性が見えてきたと言えよう。しかし、住民の感情を刺激せずにそうした大々的調査を行なう

ことは不可能であろう。事情が変わらない限り、小規模な発掘を繰り返すことで少しずつデータを積み重ねていく以外方法はないと思われる。その意味で調査の目的の明確化、建築班の要求の正確な把握とそのための方針と視点の開拓および発掘地点の設定が重要なポイントになると考える。